関東域における［kwa］［gwa］音の分布とその解釈

大　橋　勝　男

はじめに

漢語の輸入摂取に伴い，我が国中古人たちが日本語音化したとされる合拗音は，中世にかけてはかなりよく栄えたらしい。しかし，唇音退化という日本語の歴史的趨勢には抗しがたく，やがて，それは［kwa］（［gwa］）を残して他を衰微消滅させていき，さらに，室町ごろよりは，残った［kwa］（［gwa］）さえも，衰微方向におもむかしめた，と，文献に記録された国語の史的状況は教える。日本語音韻体系という基幹部に影響を与えた漢語音ではあるが，それはかなりはかない運命をたどった，とされよう。そのような歴史性を背景にした［kwa］（［gwa］）音の今日的状況は，どのようになっているのであろうか。その消長の一端を，目下筆者のとくに研究にしたがっている関東域の方言の上に見ようとするのが，当稿の意図である。

I.　/kw(a)/

まず語頭に位置するものに注目する。

1.　「火事」の発音

（拙著『関東地方域方言事象分布地図』第一巻音声篇 Map 48引用図）

(1)　「火事」の方言音事象の種類

［ka］と［kwa］とがみとめられる。

(2)　その分布状況

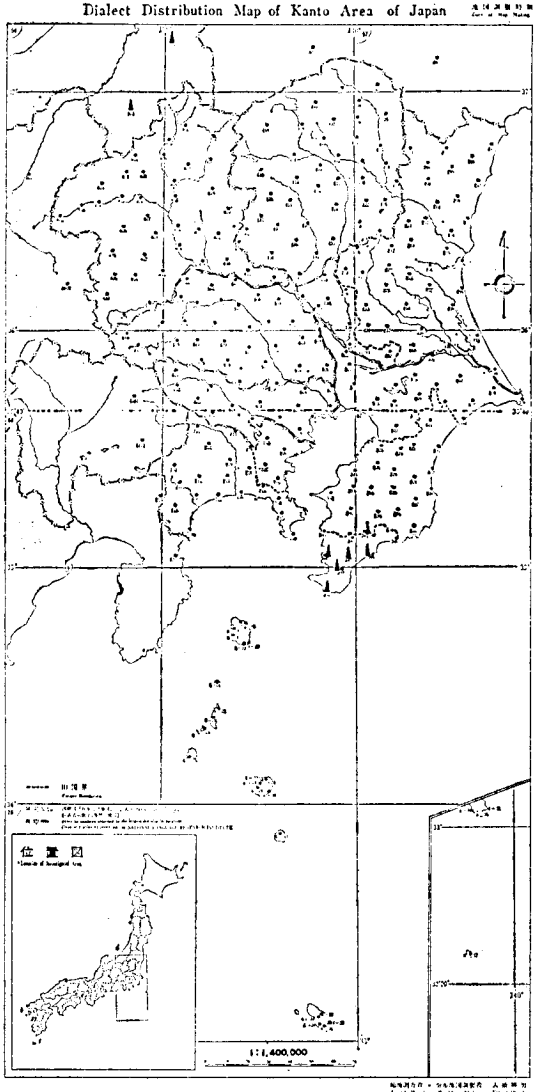
［kwa］は，房総半島南部突端の安房郡に集中的に分布し，そのほかでは，新潟県の調査地点に分布するのみである。残る地域は，すべて［ka］である。

(3)　分布解釈

これは，明らかに残存分布の相と見ることができよう。しかし，それが，何故千葉県南部に限って残存しえたのかは，大きな討究課題である。なるほど，半島の突出部であるから当地域は言語の袋小路である。このようなところに古態事象が残りがちなことは，十分予想しうるところである。しかし，とは言え，当域に残りうるぐらいのものならば，それは，もっと僻遠の地，たとえば八丈島とか青ケ島などには，なおなおのこと見られてしかるべきようにも思われる。では，安房郡の［kwa］は，新しいものだというようなことが考えられようか。――もと［ka］だったものが，何かの理由から［kwa］になったというようなことが，考えられようか。一貫して唇音退化の道を歩んで来，また歩みつつある日本語の場合，それをあえてわずらわしい［kwa］に逆行させるというようなことは，考えにくい。やはり，古態事象の残存と見るべきであろう。となって，

関東地方域 方言事象 分布地図

Dialect Distribution Map of Kanto Area of Japan



Map48 「火事」の発音（[kwa]音の有無）

The pronunciation of "kaji" (fire)
(=whether the syllable /ka/ changes into [kwa] or not.)

質問文 216 (1)家がボンボン燃える「火事」のことをどう言いますか。 Question ②「クヮジ」などとはいませんか。 (③④「お菓子」⑤⑥「すいか」の発音を問う。)

- [ka]
- [kwa]

やはり，本土半島突出部に残りえたものが，島嶼部などに皆無であるという分布相の不思議が問題となってくるのである。このようでもあるから，『日本言語地図解説——各図の説明1』が

「もっとも，関東を中心に分布している［ka］などは，あるいは，昔から［ka］のままであったものかも知れない。」（p. 2）

などとも言わざるをえなかったのは，もっともなところがある。しかし，かりにそう考えた場合でも，その「昔から［ka］のまま」だった状況の上に，新たに［kwa］の波が押し寄せおおいかぶさったということは，十分考えうることだと思う。ただし，その波は，たとえかぶさっても，あたかも砂に吸いこまれるがごとく，もとからの［ka］に呑みこまれてしまいがちだったかもしれない。しかし，千葉県南端の［kwa］の残存の事実は，その波が関東域にも，かなり根をおろしえたことを物語るものである。となって少なくとも関東本土域などには，かつてはやはり［kwa］の地域がかなり存在した可能性が強く考えられることになるのであって，現在の［ka］域は，［kwa］を経由している可能性が多分に考えられるのである。

ただ，伊豆諸島の場合は，あるいは，国研の説明のごとく「昔から［ka］のままであった」というようなことがありうるか，とも多少考えられる。そう考えることができれば，房総南端に残りえたものが，さらに僻遠の諸島に見られないというような事態も合理的に説明がつくことになる。すなわち，［kwa］の波は，島嶼部にまでは及ばなかったと見るわけである。しかし，これは，ただこう考えてみるにすぎず，そう考えうる強い根拠を現象の上に見い出しうるわけではない。『日本言語地図』1の3，「火事」の図によれば，九州やさらに南の諸島に［kwa］が色濃く分布を示していることからするなら，伊豆諸島にも，かつて当事象が伝播しなかったとは，とうてい考えられない。文献国語史学の教えるところによっても

「関東において……クヮグヮのカガに變じた年代が京都語よりも早かったことは證があり」（橋本進吉「国語音韻の変遷」<『国語音韻の研究』所収> p. 99）

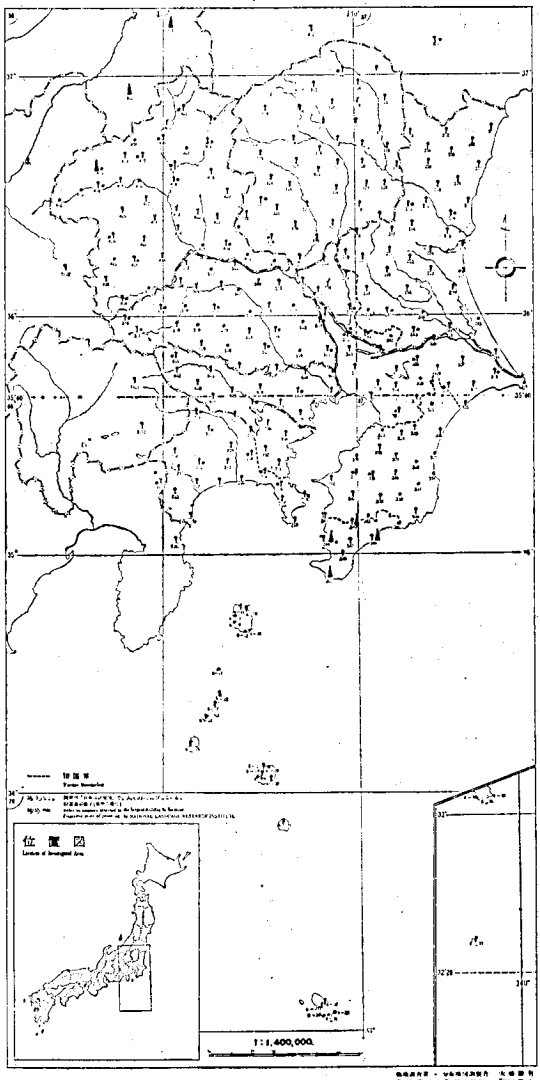
「江戸における前期の状態ははっきりしないが，後期には区別されなくなったらしく，『音曲玉渕集』に「くわの字かと紛れぬようにいふべき事」の一条を立てて注意している。また江戸の作品には混同の例が少なくない。文化年間に出た「浮世風呂」には，上方女が江戸のことばをけなして，「観音（くわんおん）さまもかんのんさま」と言うくだりがある。右の混同が江戸の方に早く，京都の方におそかったことがわかる。」（土井忠生・森田武『新訂国語史要説』 p. 156）

などとあり，このようでもあるとするならば，伊豆諸島にも［kwa］が存しなかったとは考えにくい。

このように考えてくるならば，やはり関東域には，伊豆諸島をも含めて，［kwa］が広く存し，新潟県などとも連なっていたと見るべきことになる。そうであったのに，当域では，唇音を落とすことが急で，はやくも［ka］になってしまったのだと考えられる。島嶼部なども，何らかの理由で，その変化が急であったのではないか。その変化の激しさや速度の度合には，当然地方差・地域差があったと考えられる。その結果，たまたま，島嶼部よりも，房総南端の方が古態をとどめることになったのではないか。

関東地方域 方言事象 分布地図

Dialect Distribution Map of Kanto Area of Japan



Map 49 「お菓子」の発音([kwa]音の有無)

The pronunciation of "okashi" (confectionery)
(whether the syllabe /ka/ changes into [kwa] or not)

質問文 Question	216 (①②「火事」の発音を問う。) ③では。子供の大好きな「お菓子」の場合は、いかがですか。 ④「クッシ」とか「オクッシ」などとは言いませんか。 (⑤⑥「すいか」の発音を問う。)

• [ka]

▲ [kwa]

符号下の1印 「お菓子」の「お」接頭辞の付く場合に、▲のごとく。
接頭辞のつかない「いかたの場合は、凡例の符号のみ。

(注)
地方によっては、凡例中の[k-]は[g-]である (参照, Map 70)

伊豆諸島の音声部面の進化は，他部面に比して，とかくいちじるしいらしいふしがある。この［kwa］の事項の現象の場合も，あるいはそれにあたるものなのかもしれない。

2. 「(お)菓子」の発音

〔Map 49〕

当事項は，「お」が付接しなければ語頭の /kwa/，それが前接すれば語中の /kwa/ ということになる。

(1) 「(お)菓子」の方言音事象の種類

［ka］と［kwa］とがみとめられる。

(2) その分布状況

［kwa］は千葉県南部の安房郡に集中して4地点分布する他，群馬県の北西の吾妻郡六合村入山引沼に孤存し，周辺では新潟県の各調査地点に分布する。「火事」の場合と比べて注目すべきは，それらのうちの大部分が，「お」の付接しない語形の場合にあらわれていることである。安房郡の場合，4地点のうちの3地点が［ka］と［kwa］を並存させているが，そのうちの2地点は，「おかし」の場合が［ka］，「かし」の場合が［kwa］である。(残る1地点は，「おかし」が両形に発音されている。)以上を除く地点の［kwa］は，すべて「かし」という語頭に位置する場合の発音である。

以上を除く地点は，すべて［ka］である。

(3) 分布解釈

既見「火事」の場合の分布にほぼ類似しているので，その解釈も，またそれに準じる。

ただ，注意すべきは，先図では分布の見られなかった群馬県北西部引沼にも，孤立的ながらそれが見られることである。房総南端，群馬県北西辺山地部という関東本土域の複数の辺地に，あい離れて［kwa］の存在がみとめられることになったのである。これによって，先図で〝関東域にも［kwa］音の広くおこなわれた時期があったのではないか。〟とした推定は，いっそう確固たる根拠を得たことになる。

一方，別に注目されることがある。それは語の音韻体制の条件によって，［kwa］の存立ないしは残存が大きく規定されているらしいことである。すなわち，すでに分布状況の項に記したごとく，「おかし」という語形（――語中に「か」の位置する音韻体制）において［kwa］という発音の聞かれた地点は，［kwa］の分布地点7地点（新潟県のものを含む）のうち，わずかに1地点のみであって，残りはいずれも「かし」という語形（――語頭に「か」の位置する音韻体制）において聞かれたものである。これによって，［kwa］は，語頭音節上に残りやすく，語中尾では消えやすいことがわかるのである。このことをさらにはっきりと教えるのが，房総南端の「おかし」「かし」両語形発音並存地点の状況である。それを表示すれば，次のごとくなる。

地点番号	地　点　名	おかし	かし
342	安房郡長狭町古畑	［ka］［kwa］	／
346	〃　江見町吉浦	［ka］	［kwa］
348	〃　富浦町南無谷	［ka］	［kwa］

これによれば，地点346・348の2地点においては，「菓」相当の発音が，語中の場合と語頭の場合とでくっきりと異なっており，語頭の場合にかぎって［kwa］があらわれやすいことがよくわかるのである。

さらにそのことを鮮明に語っている事実がある。安房国の中で［kwa］の分布の見られない地点が3地点ある。それは次の地点である。

地点 345　安房郡小湊字萩ノ巣
〃 347　〃 丸山町宮下
〃 349　館山市稲大堀

このうち，地点345は上総国との境界に位置し，「火事」の場合にも［kwa］は見られなかった地点であるのでさておくことにする。残る347，349の2地点は，「火事」の場合は［kwa］であった地点である。しかるに，この2地点に，当項ではそれが見られない。よく見ると，両地点の場合，当項では「お菓子」という語形でのみ発音された単存分布となっているのである。この事態は，「菓」がその前に接頭辞をとったことにより語中に位置することになったために生じたことをよく物語る。もし当2地点が単純に「菓子」として発音されたならば，おそらく［kwa］としてあらわれたにちがいないと予想されるのである。

このことは，語頭音節の発音が，語中尾音節の発音に比べて，生理的にも心理的にもより注意深く，緊張度高くなされがちなことが，このような結果をもたらしているのであろう，ということを考えしめる。

3. 「すいか」の発音（〔Map 50〕分布図略）

こんどは，語末に位置するものに注目する。その項目が，この「すいか」である。

(1) 「すいか」の方言音事象の種類

［ka］と［kwa］とがみとめられる。なお，［ka］には“［ka］N”という語末形をとるものも含まれる。

(2) その分布状況

［kwa］は，関東本土部房総半島南端安房郡の長狭町古畑，白浜町西根本の2地点に見えるほかは，関東外周の新潟県調査地点北魚沼郡湯之谷村1地点に見えるにすぎない。以上の3地点を除くと，関東地方域はすべて［ka］である。

なお“［ka］N”のごとく，語末に「ン」を伴う形式をとるのは，茨城・千葉県境沿いの両県，ならびに神奈川県三浦半島突端，新島本村などである。

(3) 分布解釈

［kwa］は，房総南端，新潟県などに見られはするものの，その地点数は極度に少なくなっている。しかし，いかに少なくとも，それがこれらの地域に存するという事実は，当事象の関東域の生息した痕跡を雄弁に語るものである。

前項までに見てきた［kwa］の分布に関する図に比して語末に位置する当項の場合には，かくも［kwa］があらわれない。かくて，語末の［kwa］は，今まさに消えようとしている。ここに，関東域における［kwa］音の，もはや衰頽・衰弱の境涯にあるらしいこと

を，はっきりとみとめることができるのである。

国立国語研究所『日本言語地図』Ⅰの「4 スイカ（西瓜）の—KAの音」の分布図を，同「3 カジ（火事）の—KAの音」の分布図と比較しても，スイカの方が，岩手・奈良・愛媛県等をはじめ，一般に分布の弱まる方向を示している。同図の解説でも，

『4図「スイカ」の—KAは「カジ」に比べると唇音の［kwa］の勢力が弱い。母音に続くという環境の違いもあろうし，また，語による違いもあったかと思われる。』（『日本言語地図解説——各図の説明1—』p. 2）

として，この事態に注目している。筆者は，その「環境の違い」ということを，語頭か語中尾かという点にみとめたい。

なお，国研『日本言語地図』の「火事」「すいか」両図を関東域について見比べてみると，［kwa］は，双方，房総南端部に，カジの図——1地点，スイカの図——2地点，わずかながら存在がみとめられる。差違を云々しうるほどの数ではないが，しかし，あえて細かく見るなら，スイカの場合の方がカジの場合よりも［kwa］の地点数が1地点多くなっている。これは，全国状況の趨勢には逆行するものである。これは拙著図の場合とも逆の結果となっている。このようなことが生じるのも，当域の［kwa］音が相当に衰微しているためであろう。

以上，清音の［kwa］について見た。次には濁音の［gwa］について見る。

語頭の［gwa］

語頭の［gwa］については，調査項目の準備がなかった。これについての調査はなされていない。これは，今にして思えば，まことに惜しまれてならない。したがって，これについては，国立国語研究所の『日本言語地図』1の中の「5 ガンジツ（元日）のGA—の音」の図を参考にするほかない。これによると，関東地方域には，千葉県南端に1地点（6649，55 白浜町白浜小字島崎），群馬県に2地点（5647，27吾妻郡高山村大字中山字判形，5666，22群馬郡倉賀野町田子屋町）見られる。周辺域では，新潟県，長野県の新潟寄りなどに見られる。

千葉県の南端には，拙著でも清音の図では［kwa］がみとめられた。また群馬県にもみとめられる場合が1例あった。群馬県の場合は，新潟・長野県境寄りに見られたにすぎなかったのに，国研の「元日」の図では，田子屋町のように，埼玉県境寄りの中央部にも見えている。これが事実なら，関東本土域に広く合拗音の存在した可能性は，いよいよ確実になってくる。

語中尾の［gwa］

4. 「正がつ」の発音（〔Map 51〕分布図略）

当項では，語中の［gwa］を見ようとする。

(1) 「正がつ」の方言音事象の種類

［ga］のみがみとめられるにすぎない。

(2) その分布状況

全域全地点すべて［ga］である。

(3) 分布解釈

清音［kwa］の場合とあまりにも異なるこの事態は，何を意味するものであろうか。合拗音そのものの衰微がいちじるしい当域の現

状にあって，その上，清音でない濁音の方がいっそうそれがすみやかであることを意味するのではないか。そうとしか解釈のしようがないように思われる。

しかし，ここで注意しなければならないことがある。国研『日本言語地図』Ⅰの「6 オショオガツ（正月）の—GA—の音」の図によると，関東域の群馬県にいちじるしい［gwa］の分布が見られるのである。それは，全県的規模で6地点を数える。また栃木南西の群馬近接部にも1地点分布を見る。一方の図には皆無であり，一方の図にはかくも多数地点の分布が見える。この差異をどう受けとめるべきなのか。被調査者の異なることによるのか。調査者の異なることによるのか。(注)

(注)

拙著図の場合，当項の質問文は，

「正月ならば皆いるよ。」

であるが，当質問文には「正月」の発音を見る視点と，「ならば」の意の言いかたを見る視点と，2つの調査事項が込められている。

そのために，調査時において，注意の重点が，時に「ならば」の言いかたの方に傾くというようなことがなかったか，その結果「正月」の部分の発音の聞きとりが不十分になるというようなことがなかったか，とおそれる。（群馬県はいざしらず，新潟県などには［gwa］が聞かれても悪くはないようにも思う。）とすればその分布解釈は，多少大まかなところでしておく方が無難であるかもしれない。

被調査者は，一方が女性，一方が男性である。男性に合拗音が残りがちとも思えない。『日本言語地図解説——各図の説明1——』を見ると，

『群馬に［gwa］の目立った分布が現われ注目される（調査の録音で確かめた）。』（p. 2）

とあるから，その存在はたしかと考えねばならない。しかし，当図にかぎってきわだたしい分布が見られ，「火事」「西瓜」「元日」などには皆無ないしは2地点程度しか見られないという極端な差がなぜ生じているのか，が大きな問題となる。この点については，同解説書は次のように論じている。

『同県で，「ガンジツ」については，わずかに2地点に［gwa］が認められ，しかも，ともに［ogwandʒitsu］という語形であった。また，「シチガツ」の —GA— の分布図（印刷では割合）では，［gwa］はなくすべて［ga］であった。これらの事実を参考にすると，群馬で「ショオガツ」に［gwa］の目立った分布の現れるのは，前の母音［o］の唇の丸めが —GA— に残って若干［ᵂga］のようにきこえるのかもしれない。したがって，この場合 /ga/ との音韻的な区別があるかどうか疑わしい。』（p. 3）

もう1つ問題な点がある。『日本言語地図』の既図「火事」「西瓜」「元日」のいずれにも一貫して合拗音の分布がみとめられた千葉県南端に，「正月」の図では分布がみとめられないのはなぜなのか。群馬県には既図のうち「火事」「西瓜」ゼロ，「元日」2地点というあらわれかたであり，千葉県南端よりもむしろ合拗音の分布

は劣勢の傾向にあるらしいのにもかかわらず，その群馬県に多数地点，千葉県南端皆無という逆の分布状況となっていることが問題のように思われるのである。このように見てくるならば先掲引用の解説の論は注目に値する論と言える。

とはいえ，拙著図 Map 49「(お)菓子」にも群馬県に合拗音の分布は（1地点ながら）みとめられるのであり，それから類推しても，群馬県に［gwa］の存在する（ないしは存在した）可能性は，十分考えられる。ただ拙著の図からにせよ，『日本言語地図』からにせよ，千葉県南端の分布のさかんさを群馬県の分布が上まわるというようなことだけは，どうも考えにくいように思われる。

5.「映画」の発音（〔Map 52〕分布図略）

当項では，濁音で語尾に位置する［gwa］を見ようとする。

(1) 「映画」の方言音事象の種類

［ga］と［gwa］とがみとめられる。

(2) その分布状況

［gwa］は新潟県の調査地点南魚沼郡湯沢町神立宮林に分布するのみであり，その他の地点はすべて［ga］である。

(3) 分布解釈

この図からも，「正月」の場合同様，濁音の場合の方が清音の場合よりも衰微の速度のはやいことを読みとらなければならない。清音の場合に合拗音の分布をかろうじて示した房総南部に皆無，群馬県下にも皆無。この事態は，合拗音の衰弱の度合がいかなるものであるかを如実に物語っているといえよう。このような中にあって，新潟県にはそれをとどめている地点がある。新潟県が，関東域諸県に比して，古態温存に関して，かなりしぶといものを持っているらしいことがうかがい知られるのである。

ただし，「映画」という熟語の成立ならびにその一般化は，それほど古いものとは考えられない。そのような条件が，この分布状況に何らかの影響を及ぼしてはいないものかどうか。しかし，今，これについてそれをたしかめるすべはない。とすれば，上記の解釈は多少ひかえめに考えた方がよいかもしれない。

ま と め

以上，各図で合拗音分布のみとめられた地点数を整理すると，次のようになる。

以上見てきたことは，次ページの表によりいっそうはっきりとする。この表によると，清音の語頭のものから語中・語尾のものへと，［kwa］の地点数が下がっていっていることがよくわかる。そのようでもあるから，ましてや濁音の語中・語尾のものは，なおさら微弱なものになっている。もはや，ほとんど衰滅していると言っても過言ではあるまい。

関東域の合拗音の残存のしかたは，もはや決して生きのよいものではなく，まさに今消えんとする状況下にある。濁音の合拗音はその速度がいっそうはやいようである。これらのなかんずく語中・語尾に位置するものなど，姿を消すのに，もうそう時間は要しまい。語頭の濁音合拗音を調査しなかったことは惜しまれる。推察するにおそらく，語頭のものは，語中尾のものより，今しばらくは生きな

調査項目 ＼ 合拗音分布域	清音			濁音	
	語頭音	語頭(中)音	語末音	語中音	語末音
	火事	(お)菓子	すいか	正がつ	映画
千葉県 安房郡	6	(1)注 3	2	0	0
群馬県	0	1	0	0	0
新潟県	2	2	1	0	1

注 (1) は「お菓子」という語形での発音地点数
3 は「菓子」という語形での発音地点数

がらえるかもしれない。しかし，それとてもどこまで持続しうるかはきわめて疑問である。清音の場合もなお多少は持続しうると思われるが，おそらくそうそうは続くまいと推察される。もし，上表の合拗音を示す地点において，同時に中年層以下についても同項目の調査をしていたら，あるいはすでにその時点で合拗音は失なわれた状況を呈したかもしれない。

合拗音は，清音よりも濁音の方が消える速度のはやいらしいこと，その各々においては，語中尾音の方が語頭音よりも消える速度がはやいらしいことは，拙著図のみならず，『日本言語地図』に徴してもはっきりと言えるようである。右表は，（注）に記したごとく，

『日本言語地図』
［kwa］［gwa］分布地点数比較

項目 ＼ 県	清音		濁音	
	語頭音	語末音	語頭音	語中音
	火事	西瓜	元日	正月
青森	24	20	20	11
岩手	19	5	15	1
富山	13	11	11	1
石川	19	15	18	3
京都	2	0	1	1
奈良	9	1	6	4
大阪	6	4	3	3
兵庫	5	4	1	0
愛媛	8	5	3	1
群馬	0	0	2	6
千葉	1	2	1	0

合拗音の分布する諸県のうち，各項目におけるその地点数の間にいちじるしい差異のある県のみをとりあげて，項目間の地点数を比較したものである。まず清音は清音，濁音は濁音内において，語頭かそれ以外かの項目を見比べてみよう。清音の場合，全般的に，語頭の場合よりも語尾の場合の方が，［kwa］音を示す地点数が下まわっている。とりわけ岩手・奈良県などは極端である。濁音の場合も，群馬県を除けば，全般的に，語頭の場合よりも語尾の場合の方が，［gwa］音を示す地点数が下まわっている。とりわけ，青森・岩手・富山・石川県などは，まこと

（注） 当表は項目間の地点数に目だたしい差異のみとめられる県をとりあげて作成した。ただし，千葉・群馬県は，関東域で分布のみられる県なので，参考としてとりあげた。

に極端である。このようであって，語中・語尾の［kwa］［gwa］は，語頭のそれよりも，かなり勢力の衰弱が先行していることが，如実に知られるのである。（それだけに，先にも記したとおり，群馬県の「元日」2地点，「正月」6地点という逆行の事態が解せない。）

次に，清音と濁音とではどうか。語頭は語頭同士，語尾は語尾同士を見比べてみよう。まず語頭，「火事」と「元日」とでは，明らかに，「元日」の方が合拗音の分布地点数が，全般的に下まわっている（群馬県のみが上まわっていて，この点も，全体的傾向に逆行しており，問題が感じられる）。次に語中尾「西瓜」と「正月」とでは，これもほぼ全般的に「正月」の方が下まわっている。とりわけ，青森・富山・石川などは，はなはだしいものがある。（このような全体傾向の中で，群馬県はとくにいちじるしい逆行傾向を呈していて注意される。奈良県も多少その傾向を見せている。）語頭の場合と語中尾の場合とでは，語頭の場合の方が清濁による差が小さく，語中尾の場合の方がその間の落差が大きいことがわかる。

以上のように見てくると，『日本言語地図』からは，①語頭音が比較的生きながらえ，語中尾音が衰微しやすい，②清音が比較的生きながらえ，濁音が衰微しやすい，③清音の語中尾音と濁音の語頭音とが，ほぼあい似た状況下（多少濁音の語頭音の方が優勢ぎみの感があるものの）にある，ということがわかる。

関東域のうちでも，千葉県南部にかたよって合拗音が残存することになった理由は何にあるのか。その理由はよくわからないが，この残存の事態からは，当域が半島の先端として，かなり古い方言地層をも有しているらしいことが予想されるのである。

（新潟大学教育学部助教授）